

2004年度ガンダーラ調査（特集 南西アジア：インド洋世界をつなぐ新資料報告：東西交渉史からみたアジア文化の変容：フィールドワークとその報告）

著者	前田 たつひこ
雑誌名	東西南北
巻	2006
ページ	76-86
発行年	2006-01-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1073/00003333/

2004年度ガンダーラ調査

前田たつひこ 共同研究員・和光大学非常勤講師

2004年12月27日～翌2005年1月3日の期間で、パキスタン北西部、ガンダーラ地方の調査に赴いた。

調査日程

- 12月27日 成田発～イスラマバード着
- 12月28日 イスラマバード発～ペシャーワル着
パーラー・ヒサル、シャイハン・デリー、ペシャーワル博物館
- 12月29日 ジャマール・ガリ、サワール・デリー、シクリ、チャナカ・デリー。カラーカル峠越えてミンゴラ（スワート）へ移動
- 12月30日 スワート博物館、プトカラⅠ、サイドウ・ストゥーバ、ガレガイ、シャンカルダール、ディール博物館。マラカンド峠越えてマルダーンへ移動
- 12月31日 フンド、タフテ・バーイ、サーリ・バロール、モフマン・ナレー
- 1月1日 シャーバーズ・ガリ、イスラマバード経由～マニキヤラ
- 1月2日 タキシラ。イスラマバード発
- 1月3日 ～成田着

年末年始の休みを利用してのわずか8日間の調査であるが、今回の目的はおもに2点ある。

- 1．ガンダーラ地方とその北接地域（おもにスワート）および東接するパンジャーブ地方における円形基壇のストゥーバの調査
- 2．モハメッド・ナリ遺跡の訪問

ストゥーバ

ストゥーバは仏塔とよばれ、仏陀の墓に由来すると考えられている。しか

し、仏陀自身が語っているように、ストゥーパは偉人たちの墓であり、仏教の専有物ではない⁽¹⁾。じっさい、パキスタンのタキシラでは仏教に属さないと思われるストゥーパが確認されている。ストゥーパの漢訳語が塔であり、仏塔とは仏教に属す塔のことである。また、仏陀の舍利が納められた塔はとくに仏舍利塔と呼ぶ。

仏塔の起源はインドにあり、仏教とともにガンダーラを経て、中国に入り、日本へと至っている。その特徴と展開を概説すると、次のようになる。

- 1．インドで発見された初期のストゥーパ（パールフトやサーンチー）は、円形基壇の上に半球形の伏鉢をのせ、さらにその頂きに日傘型の傘蓋または柱のようなものとそれを方形に取り囲む柵（平頭部分）を戴く。そしてその全体を同心円の欄循が取り囲んでいる。
- 2．ガンダーラにはいと、基壇が方形に変化し、欄循は基壇や伏鉢の側面の区画を仕切る柱として表現されるようになる。平頭は方形の立方体または逆正四角錐形となり、傘蓋部分は日傘を重ねて円錐形を形づくっている。
- 3．中国では多重の角塔となり、この形は朝鮮半島、日本へと受け継がれ、三重塔や五重塔となる。

インドからガンダーラにかけては、伏鉢部分から上部の形がかたくなままでに維持され、形に重要性があったことを思わせる⁽²⁾。一方で、基壇部は円形から方形に移行している。ガンダーラの浮彫に登場するストゥーパは方形基壇のものばかりであることから、円形基壇のストゥーパはガンダーラにおける初期の仏塔であり、方形基壇のものに先行すると考えられる。したがって、円形基壇の仏塔の分布はガンダーラにおける仏教美術の初期の広がりを示しているとも考えられる。あるいは、ガンダーラ美術にはほとんどみられないといわれるインドの影響が浮彫になる可能性もでてくるであろう。またこれらの遺跡から出土した彫像や浮彫が特定できれば、ガンダーラ美術の初期、またはインドの影響の強い美術の手がかりを得ることになるかもしれない。

ガンダーラ～パンジャーブ北西部にあって、今回調査した円形基壇をもつストゥーパは、

- a．マニキヤーラの大塔（パンジャーブ北部）
- b．ダルマラージカ大塔（パンジャーブ地方北西部、タキシラ）
- c．ジャマール・ガリ（ガンダーラ）

(1) 『ブッダ最後の旅 大バリニッパナ経』第5章12

(2) 拙稿「ストゥーパのシンボリズム」73-87頁

d．シクリ出土ストゥーパ（ラホール博物館蔵）

e．ブトカラ大塔（スワート）

調査概要

12月28日

パキスタンの首都イスラマバードには27日深夜に到着し、数時間の睡眠の後、早朝にペシャーワルに飛んだ。ホテルにチェックインしてすぐバーラー・ヒサルへ向かった。現在も軍事基地となっているペシャーワルのバーラー・ヒサルの前からインド古道に入り、チャールサダめざして走る。バーラー・ヒサルとは大城のことである。カーブル川、スワート川の本流、支流を何本も渡り、チャールサダの手前で左折するとすぐに遺跡の丘が目に飛び込んでくる。ここはアケメネス朝時代に創建された都城址バーラー・ヒサルである。いまだに相当な高さと大きさを保持している。そしてこれと小川を挟んでギリシア人支配時代に開かれた首都シャイハン・デーリーに向かった。こちらはバーラー・ヒサルと比べるとほとんど高さのないマウンドで、現在ほとんど何も残っていないが、碁盤の目状に建てられた建物跡が空撮によって確認されている。昼食の後、ガンダーラ美術の宝庫ペシャーワル博物館を調査した。「国宝級」の仏陀像、菩薩像が所狭しと展示されている。わずかな時間では調査しきれないほど質量ともにすばらしい博物館である。

12月29日

ペシャーワルのホテルを発って1時間半でマルダンに入り、左折。ここから

20分ほどでジャマール・ガリの遺跡の丘を遠望できた。さらに10分ほど走って、遺跡の丘を背景にした村に着く。遺跡への登り口のところで村人が石材を採掘していた（図1）。採掘された板状の石材は、ガンダーラの僧伽藍の壁や仏塔の基壇などに使われ、至る所で



図1 石材の採掘、ジャマール・ガリ村

目にしてきたものと同じ片岩の建材であった。遺跡の壁と現在の壁を見分けるのが難しいわけである。僧伽藍は丘の上にあり、中心をなす仏塔址はその頂にあった。主塔の伏鉢より上は失われ、階段を持つ低い円形の基壇だけが残っている（図2）。基壇に階段がついているのは仏塔礼拝の右繞が基壇上で行われていたからである。これを取り巻く祠堂は時代が下ってから造営されたものである。

ここから、途中サワール・デーリーの跡を見学に寄り道をし、さらに進むと用水路に行き当たった。ここから、

このスワート川から山を貫いて引かれた用水路が麓を流れる山陵の中腹にシクリ寺院址の基壇が確認できた（図3）。ガンダーラ美術史上もっとも有名な作品の一つ「仏陀苦行像」がラホール博物館に展示されているが、この彫像が出土した伽藍址がシクリである。この苦行像の前、同じ展示室の中央に、同じくシクリから出土した石造のストゥーパがある。この仏塔の基壇もまた円形である（図4）。

シクリ寺院址は流れが速く水量豊かな用水路を挟んだ対岸にあり、これを渡れるところまで迂回して登るとなると往復1時間以上かかるということで、日没間近であったこの時は遺跡まで登っての調査はあきらめざるをえなかった。

昨年（2004年）秋、フランスのガンダーラの専門家ティッソ女史にあった



図2 ジャマール・ガリの仏塔址



図3 シクリ寺院址遠望



図4 ラホール博物館蔵シクリ・ストゥーパ

とき、近年シクリに行った者がいないと言っていたので、是非とも訪れたかった場所であった。場所が確認できただけでも収穫である。

ここから水路に沿ってしばらく下ってから右に折れて進むと、45分ほどで幅広の「インド古道」に出た。シャーバーズ・ガリの少し手前のところであった。シャーバーズ・ガリの三叉路で左に折れ、北上した。途中チャナカ・デーリーに寄って、6柱プランをもった特異な一室を写

真に収めた後、右にメーハ・サンダの山陵を見ながらさらに北へ進んだ。20分ほどでガンダーラの北の外れ、山岳地帯への入口に当たるロスタム村に着く。この村の中程で右折してシーリーナバード、アムベーラ、ブネール、ブールを過ぎ、そしてカラーカル峠を越えてスワート川左岸の町バリコートに出た。ここからスワート川に沿って遡り、この夜の宿のあるミンゴーラに着いた。

今回は、イギリス軍との戦いで有名になったいつものマラカンド峠経由ではなく、ペシャーワルとタキシラを結ぶインド古道からシャーバーズ・ガリで北に折れて北上するルートをとった。このルートは、アフガニスタンのジャララバードあたりからクナール川に沿って遡り、そこからディール、チャクダラを経てバリコートにやってきたアレクサンドロスが、この地からガンダーラへ下ったルートとして考えられている2つのルートの1つであり、玄奘がとったルートもこれであった可能性が高い。基点となったシャーバーズ・ガリにはアショーカ王法勅石が残存しており、このことこそ、この三叉路が古代の交通の要であったことを物語っている。一方スワートのバリコートはアレクサンドロスの東征記に登場する町バジラであったと考えられているところである⁽³⁾。今回は車（ワンボックス・カー）を利用したとはいえ、カラーカル峠をじっさいに越えてみて難所と感じられたところはなく、古代

(3) スタイン『アレクサンドロス古道』148頁

においても、しかも大軍であっても比較的越えやすい峠であったらうということが実感できた。

12月30日

スワート博物館見学後、プトカラの大塔に向かった。中心をなす大塔のまわりに大小の奉献塔が多数並ぶ仏教寺院址プトカラⅠ（図5）は、スワートの州都サイドゥ・シャリーフの北の外れ、これに隣接する旧都ミンゴーラの東端に位置する。この円形基壇の大塔は、舍利容器を盗るために割られた跡が残るが、皮肉にもこの破壊によって、この塔が数回にわたって拡張されていたことが確認できる。貴重な遺跡である。また大塔や奉献塔の基壇などに浮彫が残存しているが、保存状態のよいものは博物館へ移動されていた。

プトカラ出土の仏陀像や奉献者像の顔貌、ターバンなどはガンダーラのものに比べるとインド的である。さらに、仏陀坐像を中心にその両側に合掌するインドラ（帝釈天）とブラフマー（梵天）を配した梵天勧請と呼ばれる浮彫があるが、作例のほとんどがこのスワート地方から出土している。しかも、ガンダーラの仏伝場面によく見られるように両側に「柱」を配した、仏伝の一場面という表現ではなく、単独作品として表現されているものも少なくない。ヴェーダの大神たちが中央の仏陀に向かって合掌するこのパネルは、インド系の人々を対象として仏陀の偉大さを示し、仏教に帰依させるために制作された浮彫であろう。

近くの丘の中腹にあるサイドゥ・ストゥーパを調査して、スワート川左岸を南下する。途中、ガレガイの仏陀坐像浮彫、シャンカルダールのストゥーパ（玄奘は「上軍王塔」

と記している）に立ち寄ってチャクダラでスワート川を渡り、ディール博物館に向かった。

この博物館には大きな作品はないが、チャトパトなど近隣の仏教遺跡から出土した浮彫が多数展示してある。扁平で丸顔の仏陀像、頭光背に鋸歯文や植物



図5 プトカラⅠの大塔

文を描いた「太陽型」の頭光背を持った仏陀像が多いのが特徴である⁽⁴⁾。ここからふたたびスワート川を渡って左岸に戻り、マラカンド峠を越えてマルダーンへ移動した。

12月31日

マルダーンは、かつて英国軍が北西辺境州に軍事作戦を展開した時の中心的な駐屯地であった。大きなホテルもワクワクするようなバザールもないが、ガンダーラを効率よく巡ろうとすれば、この町に宿泊するのが便利である。大晦日のこの日、シャーパズ・ガリ、プト・サリー丘、イータム丘を通り過ぎながら、インド古道をインダス川まで辿った。現在のフンドの町に入り、街中をしばらく走って左（北）折、細川を渡ってしばらく走ると、かつてガンダーラ東端の町であったフンドの旧跡に到着した⁽⁵⁾。マルダーンから2時間足らずであった。

ここは古来インダス川の渡河地点（図6）であったところで、かのアレクサンドロス大王も、玄奘三蔵もここでインダス川を越え、タキシラへ向かった。ガンダーラ（健駄邏）と天竺国を繋ぐ町であった。ここからガンダーラ最大級の仏教遺跡タフテ・バーイ、上質な仏陀・菩薩像などを数多く出土したサーリ・バロールを巡った後、いよいよモハメッド・ナリ遺跡を求めて走りはじめた。



図6 インダス川に臨む、フンド

モハメッド・ナリへの訪問を望んだのは、以前より研究対象としている大構図と呼ばれる浮彫パネルのなかでも、もっとも取りあげられることが多く、もっとも大きく、出来映えもよい作品を出土した遺跡だからである。大構図とは、蓮華座上に結跏趺坐した仏陀坐

(4) 「太陽型頭光背」の重要性については拙稿「クシャーナ朝三都の仏教美術」2005、42-56頁参照

(5) 玄奘はガンダーラ国は「東は信度河に臨んでいる」(『大唐西域記』巻2.4.1)とし、フンド（烏鐙迦漢荼）も信度河に臨むとある（同2.4.18）

像を中心にいずれも蓮華に乗った菩薩たちを多数あらわした浮彫板（図7）で、かつては「シユラヴァスティーの奇蹟」を表した場面と考えられてきたものである。近年、この解釈は多くの学者によって否定され、様々な論考が試みられたが、未だに定説をみない。ゆえに苦肉の策として、たんに「仏陀説法図」と呼ばれることが多い。私自身は、涅槃後の仏陀が天上世界で、将来の仏陀、すなわち菩薩たちを前に説法している場面と考えている⁽⁶⁾。



図7 モハメッド・ナリ出土「大構図」

同行してくれたパキスタン人考古学者ニダー・ウッラー・セフライ氏に尋ねたところ、そのような遺跡は知らないという。そこで地図に書き込まれた地理を頼りにサーリ・バロールからペシャーワル方面に向かって裏道を通り、だいたい検討で地図に標された地点の近くまで行き、モハメッド・ナリ遺跡の探索が始まった。雨の中、そこら中で「モハメッド・ナリ」なる遺跡を尋ねて回った。聞き回っているうちに、一筋の光がさした。近くに「モフマン・ナーレー」という村があることがわかったのである。このあたりはパシュトゥン族のモフマン部族の地域であることから、このモフマン・ナーレーが「モハメッド・ナリ」の正しい名称だと理解できた。

橋を渡り、細い道を辿って村に到着した。仏教遺跡の「指標」となる仏塔を探したが、みあたらない。村の人に尋ねると、ずいぶん昔にはあったが、いまはないという。それでも、彼がかつて仏塔があったと主張する場所に案内してもらった。そこはかなり大きな「広場」（図8）であった。一人の「証言」では不安なので、他に数人の人たちにも尋ねてみたが、みな口を揃えて「ここにあった」と答えた。スタインが著作『アレクサンドロス古道』の中に書き残しているように、おそらくストゥーパを形成していた石は、村人の建築資材として長年にわたって持ち去られ、ついには姿を消したのであろう。

(6) 拙稿「ガンダーラの 大構図 について」 モティーフによる解釈」参照



図8 モハメッド・ナリの仏塔址、モフマン・ナーレー



図9 マルダーン博物館蔵仏陀坐像

近年報告のない遺跡であり、ほとんど何も残ってはいないと思っていたが、想像以上であった。夕闇と降り続く雨のため、広場近辺に「痕跡」を探すことはできなかった。

1月1日

マルダーンで新年を迎えたが、イスラーム色を押し出す現政権下では「お達し」もあり、普段と何もかわらない、いつもと同じ朝を迎えた。しかし、マルダーンでは予期せぬ小さな発見もあった。ツアーガイドにもらったパンフによると、この町にも小さな博物館があった。そこでプログラム

を変更して、新年最初の調査として「博物館」に向かった。比較的新しいビルの一隅にあり、タフテ・バヒー、サフィアーバード、ルスタム、マルカナ、ルンド・フワル、カトラング、フンド、バジャ・スワービーの警察署が摘発した盗掘品の一部が展示されていた。重要なものはペシャーワルへ運ばれ、小品ばかりであったが、出土地域がはっきりしていることもあり、興味深いものであった。なかでもタフテ・バヒー出土の仏陀坐像は、顔を欠損するものの、頭光背の周縁部に放光表現が施された、ガンダーラでは珍しい作例であった(図9)。ここから、シャーバーズ・ガリー経由でマニキヤーラの大塔へ向かった。

広大な首都イスラマバードを通り抜け、ラホールへ向けてGTロードを1時間ほど南下すると、左手にその姿が見えてくる。GTロードからかなり離

れているにもかかわらず、伏鉢の形がはっきりわかるほど巨大なストゥーパである（図10）。周辺に遺構は見あたらず、円形基壇の上に巨大な伏鉢部が残る。基壇の東西南北の方位面にそれぞれ両側に出っ張りのある階段を持ち、基壇上に右繞路が確保されている。



図10 マニキヤーラの大塔

かつては、アレクサンドロス大王の愛馬ブーケファロスがこのあたりの戦いで戦死し墓が設けられたとの記述を受けて、このストゥーパがその墓であると考えられたこともあった。

1月2日

イスラマバードの西に、時代を超え、古来大学都市として栄えた都市タキシラの遺跡群がある。アレクサンドロスも玄奘もこの地を訪れた記述が残る。かつての天竺国の入口にあたる。このマケドニア王が滞在し、インドのマウリヤ朝のアショーカが太子時代に総督を務めた都市址ビール・マウンド、グレコ・バクトリアの流れを汲むギリシア人王たちが築き、遊牧民王朝が受け継いだ都市址シルカップ、クシャーン王朝が建て、玄奘が訪れた街シル・スフといった3つの都市址のほか、太陽神殿とも拝火神殿ともいわれるジャンディアル神殿址、周辺の山陵地帯にはジョウリヤーン、モラモラドゥなど有名な仏教遺跡が残る。なかでもダルマラージカはアショーカ王創建と伝えられる仏教遺跡で、その中心をなす大塔はもっとも早い時期に建てられた仏塔の一基と考えられている（図11）。

伏鉢のプランは車輪のように中央に円形、そこから複数の車輻が放射状に延びる石積みを核にして伏鉢を作っている。このようなプランをもつ仏塔はガンダーラにはなく、インドに類例が見られる。基壇は円形で四方に階段が設けられている。階段の基壇側の両側には、マニキヤーラと同じように方形の張り出し部分がある（図11）。

ジョウリヤーン寺院址には、「飾られた仏陀像」が主塔脇に並んだ奉献塔の



図11 ダルマラージカの大塔

基壇部分にみられる。
装身具を身に飾ったこの特異な仏陀像はアフガニスタンのハッダやバーミヤンの壁画、カシュミールの金銅仏に多くみられるもので、ガンダーラでの出土例はほとんどなく、ここ天竺国にみられるのは興味深いことである⁽⁷⁾。

また主塔正面基壇部分には右手は欠損するが、左手を衣をとるようにおろしたストウツコの立仏がある。このような仏陀像はガンダーラの石彫仏にはなく、珍しい作例である。

これまで、太陽型の頭光背がガンダーラにはほとんどなくマトゥラー、ブネール、スワート、ディール、マラカンド地方にみられることはみてきたが、今回、わずかながらガンダーラの北辺部にもみられたことは収穫であった。今回の調査で得られた新たな資料はわずかでしかないが、今後の研究には欠かせない貴重なものとなるう。

タキシラ調査を終えた夜イスラマバードを発ち、闇の中、仏教が東伝した道の1つを辿るようにカラコルムを越え、タクラマカン砂漠を横切って、翌1月3日成田に到着。調査は終了した。

参考文献

玄奘『大唐西域記』(水谷真成訳)平凡社

『ブッダ最後の旅 大バリニッパーナ経』(中村元訳)岩波文庫 1980年

アルフレッド・フーシェ『ガンダーラ考古遊記』(前田耕作監修、前田龍彦ほか訳)同朋舎 1988年

オーレル・スタイン『アレクサンドロス古道』(前田耕作監修、前田龍彦訳)同朋舎 1985年

前田たつこ

「ストゥーパのシンボリズム」『和光大学人文学部紀要』第33号(1998) 73-87頁

「飾られた仏陀に関する一考察」『和光大学表現学部紀要』第4号(2003) 159-173頁

「ガンダーラの大構図について モティーフによる解釈」蔵持不三也・永澤峻・松枝到編

『神話・象徴・イメージ』原書房 2003年

「クシャーナ朝三都の仏教美術」『東西南北』2005、42-56頁

(まえだ たつこ)

(7) 拙稿「飾られた仏陀に関する一考察」参照